

「歩きながら」～ 迷いと挑戦、そして発見 ～

大阪母子医療センター 新生児科 豊 奈々絵

さかのぼること二十数年前、医師1年目として小児科医の道を歩み始めました。まだ何もできない自分でしたが、患者さんやご家族からは一人の医師として向き合われます。周囲は優秀な人ばかりに見え、自分がやっていけるのだろうかと不安を抱えながら、上級医の背中を追いかける毎日でした。それでも、知らなかったことを一つずつ知り、断片だった理解が少しずつつながっていく過程は不思議と楽しく、学ぶことの面白さを感じると同時に、命を預かる責任の重さも実感していました。

経験を重ねる中で迷いを感じていた頃、先輩から「歩きながら考えてみたらいいよ」「選択肢を増やしておくことも大切だよ」と軽く声をかけていただきました。今できることに向き合いながら、いくつかの可能性を準備しておく。その姿勢が、自分を追い込みすぎずに歩き続ける支えになってきたように思います。迷っているときは、歩きながら考える。それが、いつしか自分なりの軸を形づくってくれていました。

年を重ねるにつれて、健康や家族のことなど、思いがけず足踏みする出来事もあります。その時の自分にできることを、無理のない範囲で続けること。そして今の年齢になって、自分の身体を知り、ときには立ち止まって休むことの大切さも実感するようになりました。自分を大切にすることも、歩み続けるための土台なのだと思います。

周産期医療は、臨床にとどまらず、家族支援や教育、制度づくり、社会との対話など、さまざまな関わりを持つ分野です。働き方としても多様な役割があり、立つ場所が変われば見える景色も変わります。科学的知見や技術はもちろん重要ですが、目に見えにくい関わりの中にこそ医療の質を支える力があると感じています。若い世代に刺激を受け、先輩方に教わり、支えられながら、今でもなお新たな発見があります。年齢とともに、手を動かすだけでなく、人をつなぐ役割も増えてきました。頼りになる仲間とそれぞれの強みを持ち寄りながら前に進めることの心強さを日々感じています。

一人では難しいことも、力を合わせることで形になっていく。そうした積み重ねが、この仕事の大きな魅力の一つなのだと思います。働き方やキャリアは、人の数だけあります。その違いを尊重しながら、互いに支え合い、それぞれが自分らしく力を発揮できる職場を育てていけたらと思います。私自身もまだ歩みの途中です。これからも、迷いながらも焦らず、自分らしく進んでいきたいと思っています。

[著者略歴] **豊 奈々絵** (ゆたか ななえ)

2002年 大阪医科大学卒 (現大阪医科大学)

2002年 京都第一赤十字病院 小児科 初期研修医

2004年 淀川キリスト教病院 小児科 後期研修医

2008年 大阪母子医療センター 新生児科

2012年 りんくう総合医療センター 小児科

2013年 淀川キリスト教病院 小児科

2025年 大阪母子医療センター 新生児科

日本小児科学会専門医・指導医、日本周産期新生児学会専門医・指導医、日本成育医学会認定 暫定フォローアップ認定医、日本小児科学会認定 出生前コンサルト小児科医、日本周産期新生児学会認定 新生児蘇生法インストラクター、こどものこころ相談医

～DEI推進委員会より～

道しるべとなる先輩医師のひとこと

「歩きながら考える」という言葉には、ゆっくりでも回り道でもよく、つまずいてもまた立ち上がりながら自分の歩幅で進めばよいのだと、優しく背中を押してくれる温かいメッセージが込められていると感じました。年齢とともに環境や仕事上の役割は少しずつ変化していきますが、その中でも人と人とのつながりを大切に、互いを尊重する姿勢の積み重ねが社会を支えているのだと改めて気づかされました。完璧な答えをすぐに求めるのではなく、歩きながら考えていくこと。その過程で、新しい視点や可能性が見えてくるのかもしれない。そうした姿勢は、持続可能な働き方や新たな挑戦にもつながっていくことでしょう。迷ったときや少し疲れたときには、皆さんも「歩きながら考える」という言葉を思い出してみてもいいのではないでしょうか。

責任編集
DEI推進委員会